

〔論文〕

博物館における知的生産の技術

——技術史研究との関連を例として——

“Technologie der Wissensproduktion” im
Museum als Beispiel Technikgeschichte

種 田 明*
Akira OITA

“Technologie der Wissensproduktion” im Museum als Beispiel Technikgeschichte

Der vorliegende Aufsatz beschäftigt sich mit der neuen Ansatz der museumskundlichen Forschung. Aufgrund eigener Museumserlebnisse schlägt der Verfasser vor, Museumsforschung (im“japanischen” Sinne) mit Technikgeschichte (nicht nur im japanischen, sondern auch im weiteren Sinne) zu verbinden, um in die sog. “informatisierten Gesellschaft” System zu bringen.

Wenn man von dieser“informatisierten Gesellschaft” spricht, ist ein naheliegendes Problem, wie und unter was für Bedingungen ihre Techniken im heutigen Zeitalter zu steuern und ihre Informationen – hier, besonders über Museen – zu verarbeiten.

(Eine Forschungs-und Wissenschaftsmethode ist „Technologie der Wissensproduktion“, auf japanisch Chiteki-Seisan-no-Gijitu, deren Namen und Begriff Prof. Dr. Tadao Umesao, Direktor des staatlichen Museums für Völkerkunde gegeben hat.)

訳

小稿は博物館(学)研究に、新たな問題提起として『知的生産の技術』論を導入すべきとする観点から、その二三を考察している。そしてこれは、所謂「情報化社会」における体系化のため、個人的な博物館体験に基づいて、博物館研究と技術史を結び併せることを試みたものである。

このような「情報化社会」を論ずるとき身近に問題となることは、人はどのようにして、またいかなる条件の下で、その(社会の)技術を扱い、その情報(ここでは特に博物館に関して)を処理するかということである。

(この、さまざまな分野における研究・表現法のユニークな総称としての『知的生産の技術』とは、国立民族学博物館館長の梅棹忠夫氏による、その体系化を立てようとする試みの概念・命名である。)

I・独学の技術史と博物館学

独学の「独」は二重である。ドイツにおけるという意味と、経済学(経済史)からアプローチする研究者は稀で、独習してきたという意味なのである。

1970年代の後半にドイツに留学中、文章を書くという

ことについて随分考えさせられた。練りに練って自分で「よし」と思った文も、友人のドイツ人に真っ赤に直され、いたるところに「?(クエスチョンマーク)」を付されると、内心おだやかではない。二度が三度となると笑顔は引きつり、彼に好意を求めたはずなのに、彼と私

* おいた あきら

連絡先 流通科学大学商学部経営学科

〒673 兵庫県神戸市西区学園西町3-1 Tel. 078-794-3555 ext.324

自身の存在をかけたケンカ腰の議論になってしまうのである。その理由の一つには、当時私の専攻する技術史〔Wirtschafts- und Technikgeschichte〕が、ドイツにおいてもやっと市民権を得たばかりの学問であった状況も介在していた。(1)

その反対にドイツでは、博物館は日本よりもはるかに長い歴史を持ち、私の「（館内での）驚きや発見」、収蔵品の「量と質（の充実）」、館スタッフや館内研究者の「能力と手腕（の高さ・それらを発揮させる市民の後押し・ボランティア）」等々なぞ彼（ら）にとっては当たり前すぎるものであったのだ。専攻専門の技術（博物館）だけでなく、「ムゼウム」と名の貼くものは出来るかぎりたくさんを観てやろう、と決めた切っ掛けは文章（独作文）を書くことであった。

やく20年前（1970年前後の私の学生時代）、技術史のバイブルにあたる洋書は数少なく高価であった。また和訳書もR. J. フォーブス『技術の歴史』、Ch. ジンガー『科学思想のあゆみ』、L. マンフォード『芸術と技術』などごく僅かしかなく、ちょうどS. リリー『人類と機械の歴史（増補版）』が出たばかりであった。後に調べて解ったのであるが同じ頃ドイツでは、1971年のミュンヘンにおける国際博物館会議（ICOM）あたりを契機に、産業技術と博物館に関連した出版物が増えている。日本でもたとえば中岡哲郎『工場の哲学』（平凡社、1971）、マンフォード『技術と文明』（美術出版社、1972）、吉田光邦『機械』（法政大学出版局、1974）、内田星美『産業技術史入門』（日本経済新聞社、1974）などが出て、私の技術史研究のいわば導きの糸となったのである。

ようやく入った大学院では、経済（史）学と技術と博物館を結びつける研究をしているといくら説明しても、なかなか解ってもらえず、自分が異邦人であるという意識ばかり強くなったことを記憶している。これは後智恵であるが、ヨーロッパ（イギリス・ドイツ）社会経済史を勉強していた私にとっては、自身のテーマを「産業革命」研究から先端「技術社会」の史的研究へと繋げる道は必然のものであった。折しも時代と社会の文脈は、アポロ・大学紛争・大阪万国博・ベトナム戦争反対そして和平・公害問題・オイルショック・ニクソンショックなどであった。「技術」を社会科学的に研究する分野とその学会が、日本にも必ずできるだろう。(2) もしでなければ自分で創ろうという向こう見ずな、一匹狼までは至らない、犬のような気分でしたのは確かである。

このような学生を留学生に採用したのであるから、文

章が真っ赤になるのは避けがたいことで、むしろ有り難い「関門」であったと現在では思っている。こうして独学とドイツの大学でのゼミナールや友人との議論をとおして、私の技術史研究・博物館理解の方法論とその知的生産の技術(*)の基本は獲得された。私の属する世代までの研究者のほとんどが、否、師事・私淑も「独学」に含めるなら現在の大学院生までの総てが、独学で技術史を学んできているのである。(3) そしてまたおそらく「独学」は何も技術史に限ったことではなく、1970年代（特に後半）以降一般に関心を集めている社会科学の領域、より正しく言うなら私が興味を持つ領域を見てもわかるが一産業考古学・博物館学・社会思想史・地名研究・地中海学・平和学・生活史・EC学・比較文明論・社会史等々多くの小さな学会が誕生しており、いかにたくさん孤立無援の研究者がいただろうかが予測されよう。

独学者は常に精神を張りつめている。しかしながら、同じものを見、同じデータを用いても文章に書くときとみな異なるように、精神活動の統合原理（＝知的生産）だけ独自で個性的なものであればいいのである。文明は交流して進歩するごとく、個人もできるだけお互いに情報を交換するべきではなかろうか。弓の弦も時どきは緊張を弛め、足場や的について経験を語り合おう、という先見性ある独学者や小グループの声が、1970年前後頃から少しずつあがりだしていた。そしてそれらが今や知的潮流となりつつあると思う。コンピューターやワープロ、AV機器の普及も潮流形成に大いに寄与しているといえよう。まさにこの、次の時代へ向う技術と情報の社会化そのものが技術史の研究対象の一つなのであり、今や独学は独善で、研究者は丸山真男の云うタコツボに安住できない時代なのである。

II・身近な技術

知的生産の技術が意味するものとたいへん近い関係にあるのは作文技術である。(4) たしかに人間の経験の蓄積と利用が高度に伸長されるためには、物的および知的生産に関する知識が文字により固定され、理解され、情報として伝わらなければならない。おおざっぱに言うと、経験の蓄積と利用の仕方・やり方が知的生産の技術であり、蓄積と利用の結果（＝知識・情報）の伝え方が作文技術なのである。

1970年代と1980年代とを比較してみると、経験の蓄積と利用の仕方はずいぶん様変わりしたが、伝え方（＝作文）の方は、第二次大戦後の「綴り方教室」以外、教育改革の審議項目にもなってないはずである。たとえば、

70年代に100万円以上したワードプロセッサが単能小型化して、数万円でだれもが買えるようになった。それ故に、現在のわが国では、かつて欧米においてタイプライター(5)がもたらした以上の、一般市民の手によるさまざまな量の情報発信が展開しているのである。しかし他方、わが国の大学で、作文(コンポジション)・レトリック・論述(エッセイ)などの講座や科目のあるところは、80年代後半に至ってもほとんど無きに等しいのである。また、加熱している大学受験戦争を一変するかもしれない出題「小論文」について、高校・予備校・教師と生徒(本人)の対応や力の入れ方はバラバラで、なお個人的なやり方のままなのである。

作文技術を持ち出さなくても、本来技術とは身近なものである。好き嫌いやハンディキャップの大小はあっても、意欲があり努力をするものなら誰でも得ることができるのが技術である。そして大いに皮肉をこめて言うなら、わが国ではあらゆる道、生活、あるいは職業(職種)にエキスパートやベテラン(英語本来の意味でなく、日本語英語での意味)がいて、各々の専門の「技術」について「解説者」、「評論家」としてメシを食っているのである。さらにはスポーツ、芸能演劇から料理、車の運転、そしてついには試験のカニングにまで技術(あるいは軽く「テクニク」という言葉が用いられている。近年においては先端技術をハイテク、金銭投機・資産運用のコツを財テクと呼ぶことは、小学生でも知っている)のである。

ところが、技術が身近になればなるほど、知的情報の中身がうすっぺらくなってきている。情報は処理し、利用しなければ価値を持たない。しかし、文章力や作文技術に端的に見られるように、あるいはOA事務機器の進歩と普及などの「社会の技術化」は、人間から考えることを奪っていくのであろうか。また、私たちは現代技術そのもの、あるいは現代技術の単線的進歩を過信してはいないだろうか。いま、『99.999%(ファイブナイン)安全である』という信頼性を、限りなく100%に近く「完全な」安全ととるか、0.001%にせよ、事故の被害者にとってはそれは100%「危険」なのだととるかで、技術—それが身近なものであっても—の評価はまったく異なった正反対のものになるのである。

そうはいっても日常生活において、私たちは「朝だ、太陽が(東から)昇るよ」というが、「朝だ、地球が—自転したぞ」とは言わない。さらには作文技術を「レトリック、つまり美辞麗句を捏ね回す表現術で、作文の本質・基本は心である」としてなおざりにする一方、金銭

自動支払い機や自動販売機は絶対に間違わないと信じているのである。他方では、医療機器の進歩が新しい病気を見付けだし、医者(技術者)にかかった時には、医療機器の精度(技術)を信頼するほかには、情報を与えられても素人になすすべはないのである。作文技術も、機械に組み込まれた半導体技術も、ともに身近な私の技術史の研究対象なのである。

こうした観点からの技術史は、理工系の特殊技術(ここでは「科学技術」と総称する)から、ごく一般的で身近な技術(同じくここでは「経験技術」という)まで、幅広く視野におさめていなければならない。加えて、技術と情報の社会化をシステムとして捉えるとき、それら一たとえば、法律及び議会制民主主義や交渉・折衝のやり方(ネゴシエーション)、育児や教育・授業の仕方、子供の遊びや祭りの手順などなど—をここでは「社会技術」とみることができよう。(6)

いうまでもなく、技術は人類の誕生とともに生まれ、ともに歩んできた。ところが、それだから技術は、現代社会のなかであまりにも日常的で身近にすぎるか、あるいは高度に専門的に体系化し、ある(肝心な)部分はブラックボックスに入ってしまった見えなくなっているかのどちらかなのである。このような今日の、そして明日の情報文化の世界へのアプローチ(接近方法)、研究分析のパースペクティブ(視覚・視座)として、私は技術と技術史を考えて行きたいのである。

III・博物館のうちとそこ

余暇や娯楽のため、あるいは社会教育の場としてだけでなく、近年さまざまな分野と領域で個性ある博物館が国・地方自治体・企業・個人によって設立されてきている。技術と技術史は、これらの博物館、なかでも理工系(科学技術)、歴史関連(経験技術)、企業関連の博物館と、特に研究・教育・情報交換の機能の面で深く結びついている。(7)

たしかに、保存すべきものや展示・収集品を受け入れる設備と建物が揃い、スタッフや研究者の熱意が実ることとは、それだけで嬉しいことである。一般市民が科学技術や経験技術の情報や実物資料(8)を知り、実際に眼にすることができるのは、生産の現場か博物館の知的空間しかないからである。

けれども、こうした博物館の豊富で体系的な知識や経験の蓄積の仕方、利用の仕方は組織内部—博物館のうちにベクトルが向けられていて、一般市民—博物館のそと—のサイドからは、なおまだそれへの「とっかかり」

が掴みにくい、そしてこれは私見であるが、わが国の現在の状況は、約15年ほど前の欧米の状況に似ていると言えるかもしれない；西ドイツの例を挙げてみようー

「連邦共和国及び西ベルリンの博物館入館者総数は、1970年1600万人、72年1700万人、75年2200万人、77年3200万人と増大してきている。ドイツで最も人気のあるスポーツ、サッカーの入場観客総数が、72年1700万人であったことを考え合わせると、この数字が発表された当時（72年『ドイツ都市会議』）、研究教育界・一般市民の耳目を驚かせたことが想像できよう。そして何よりも一番驚いたのは博物館自身であった。」(9)博物館への関心の高まりについては、いくつかの要因が考えられる。第一のものは、19世紀以来、環境保護や記念物保存の活動を支えてきた市民のイニシアティブである。第二に、1960年代及び70年代に各ラント（州）の記念物保護法が、価値合理的かつ現実的に改正されたこと、そして第三は、ユネスコが1975年全ヨーロッパ規模で提唱した「記念物保護年」のキャンペーンであった。

また行政政策面から、都市計画・再開発・観光そして研究教育の核として博物館、記念物を位置付けたことも大きい。さらに経済面と関連させて、オイルショックの文化的反動（リアクション）とみる人もいる。あるいはそれと反対に、R. クーデンホーフ＝カレルギー（Richard Coudenhove-Kalergi）やジャン・モネ（Jean Monnet）の欧州統合思想（10）との文化的結びつきを言うことも可能かもしれない。これらはいずれも、博物館のそこからの要請、刺激だったのである。

もちろん博物館のうちのわが対応もすばやく適確であった。ドイツはもともと、市民・個人によるイニシアティブが産・官・学を動かし、博物館を創ってきた経緯と歴史を持つから素早い反応ができるのかもしれない（ほとんどの博物館が公立か、さもなくば国の、または公的な補助金を受けている）。そして音楽や演劇に多額の公的補助を、しかも長期にわたって支出する土壤もあるのである。

したがってもちろん各地、各館（11）でやり方はさまざまであるが、70年代の全体的傾向を象徴的に言うと、これまでの少数者を対象にした啓蒙・教授型から、多数者を対象の参加・大衆科学型への転換であった。ここで大衆科学とは、俗受のするという意味ではなく、科学技術及び最新の研究水準においてはあくまでも厳正であり、しかも表現（写真、イラストや展示のパネル・解説の作文技術など）において老人・女性・子供にわかるレトリックを用いる、ということである。もちろんこのレトリ

ックも俗に言う美辞麗句の表現術ではなくて、「言語によって情報や意見を明快に、効果的に、表現・伝達するための方法論」（12）のことをさすのである。このような参加・大衆型の博物館では、知的生産のベクトルが、博物館のそとへ向けられていることは言うまでもないであろう。

現代のドイツ・ヨーロッパでは、こうした博物館が相互にネットワークを形成し、アメリカも加え、大学や研究所（企業も含む）と連係して、つぎつぎに技術史の知的情報の生産ーたとえば図書出版・研究報告・教材作製・シンポジウム開催・祭りへの参加・公開実験や復元等々ーを展開しはじめている。技術史博物館は、知的生産の技術をまさしくフルに実践し、応用している研究・教育の宝庫ではなからうか。このようにして、博物館のうちとそとをむすぶ技術史研究者の協団体ドイツ語でKreis（クライス）という（13）から私は情報の生産、処理、伝達について、多くのことを学んだのである。

技術博物館と技術史は、現代の知的活動を担う市民にとって、人間の生活の全体像と近い将来をみわたすことのできる知的な「展望台」の一つである。いまわが国には、中央（センター）となる国立、ないしは大学付属の技術史博物館がまだない。しかし、もし欧米に匹敵する博物館ができ、国内とアジアを含むネットワークが形成され、研究者の協団体の知的生産が欧米のネットワークとたとえばパソコン通信で結び合い、相互に比較できるようになれば、世界の、少なくとも私たちの社会の「（技術に対する）価値観」はいまよりも高く、広く豊かなものとなるであろう。

IV・選・遊・考・絡

1. おそろおそろと技術史研究の道を歩みはじめた頃、一つの指針を与えてくれた本があった。それは邦語や外国語の入門書でも概説書でもない。野上弥生子『秀吉と利休』であった。感銘を受けたくだりを要約すると、秀吉は利休によって、常々よいもの、芸術的完成度の高いものばかりを見せられてきた。秀吉の目、鑑賞眼の世評が高いのは、こうした長年の「利休の」教練の結果であったーそしてこれは、二人の確執の遠因の一つにつながっていくのであった。

秀吉の場合は茶事についてのもの（たとえば茶器）であるが、知的生産に携わる人たちの場合、ここに言う「よいもの」とは優れた友人たちであり、自らの眼で選んだ立派な人物のことである。出身学校の名前や家柄などより、語り合える優れた友人を「選択」することー前述の

ネットワーク（情報網）も、クライス（協同体）もここから生まれる一は、知的生産の技術の基礎論ではなからうか。

『秀吉と利休』を読んで以来、私は博物館で、そして産業遺産の前で、展示品（「よいもの」）を選び、構成・制作した人（たち）の目を意識し、彼（ら）の意図を考えながら見学するようになったのである。数少ない博物館学の講義・科目を、花嫁道具としてではなく、一生であれボランティアであれ仕事として選んでくる学生たちに、日本のクライス（たとえば本学会）はあまり後押ししていないのではないだろうか。

2. 技術史研究の上でよいもの、優れた友人たちに、ではどうすれば出会えるのだろうか。偶然や運もあり、才能、相性、気心などさまざまな要因があるが、かなりの程度は主体的な働きかけによるものであると思う。前述の作文技術は、出会いを求める手紙を書くときに応用できる。しかしながら昨今「会議中は黙っていて、パーティでは食べてばかりいる」普通の日本人は、作文技術より先に会話と討論技術・マナーを習得するべきである。

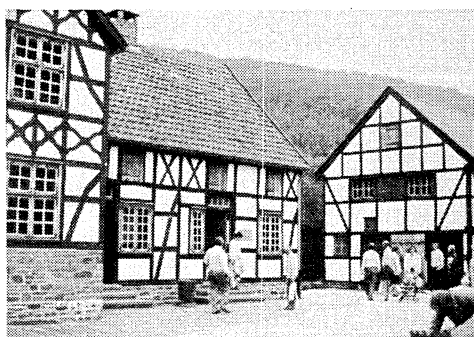
私見であるが、会話を主体的に働かせる自己訓練に最適な「場（フィールド）」は、「都市を歩くこと」である。私は恥ずかしいことであるが、L. マンフォード（『歴史の都市 明日の都市』）を気取って、都市を歩き回りさえすれば何かに出会える、とたかをくくっていた。しかしマンフォードの言う都市とは文明のことである。

写真① アルンヘム野外博物館（オランダ）



アルンヘムはデュッセルドルフの北西約80km、車で約2時間のところにある。

写真②（技術的文化記念物の）ウェストファーレン野外博物館（ハーゲン市）



ハーゲンはドルトムントの南20km、車で約40分のところにある。

文明の凝集点として技術博物館を観てはどうか。このマンフォードの示唆に気づいたのは、実際にドイツの諸都市を歩き始めてからであった。主体的といっても「出会うてやろう」と身構えたときには、むしろ空振りが多かったのである。

歩くことはだいじだが、日本人的な勤勉さをもってではない。ここで歩くことはヨーロッパ的な意味合いで、都市も博物館も遊歩することなのである。日本でも海外でも、都市や博物館のなかで、ガイドブック片手に、まなじりを決して真面目に観光旅行をしているのは、たいてい日本人の中年の人たちである。遊び・ユーモア＝不真面目というような態度は人を近づけない、独学者の緊張と同じたぐいである。それよりも、産業遺産を見終えてへたばった時の一杯の水、都市のなかで道や時間を尋ねたときの笑顔から、出会いや交流が初まることが多いのである。

遊び、すなわちいっけん無駄・不真面目に見えることのなかから、私たちは大切なことを学んでいるのである。子供の遊び（玩具）・大人の遊び（稽古事や学問）にも、車のハンドルにも、都市にも、博物館にも遊び（ごころ＝ユーモア）なくしては「知的生産」物は生まれえないであろう。

3. 都市と博物館を歩いた体験から、多少の考察を「知的生産の技術」として抄録してみよう。これはいわば（私の）技術史と博物館の「一人歩き術（ハウトゥ）」のエッセンスである。かりに架空の都市（A市とする）の或る技術史博物館（B館とする）に、以前からぜひ行ってみたいと思っていた。一泊二日でB館を見学に行くこと

を例として：

a) 出発前にすること＝時刻表（車の場合は道路地図）、A市のホテルリストと観光案内パンフレット（A市観光局に「手紙」で頼めば必ず、たいていは無料で郵送してくれる）から、必要な{情報メモ}を作る。〈車で行く場合もA市内は歩くことを前提条件とする。〉

b) A市に到着して＝駅（Hbf： Hauptbahnhof）、あるいは駅近くの書店でA市の{地図}〔現地の編集発行のもの〕を買う。この地図と観光案内パンフレットとでB館以外のみるべき、または興味ある博物館をチェックする。

B館へは歩きか、バスまたは市電（路面電車）、そして最悪でも地下鉄で地図を頼りに行く。

昼食または夕食はその土地の{料理}を食べる－料理や行事について、駅とB館で土地の人に尋ねる（2回2人以上にきく）。

c) B博物館にて＝3回みる。

1回目は大ざっぱに、2回目は研究テーマに応じて重点的に、最後は散歩しながらの見学である。

ミュージアムショップでは、研究者向けか一般・学生向けかに注意しつつ{館独自の編集・出版物}を点検する。

館の建築や館の周囲の環境・立地も見るべきところである。

d) 帰路、あるいは帰宅後＝記録と考察。

{情報メモ}に実行したことや時刻、印象寸評などを整理する。入場券、食事や買物のレシート、自作のスケッチや写真その他のデータ（ネガのファイル番号など）も、貼ったり記入したりする。

B館で買った書物・教材などと、その時までで作っていた新聞の切り抜きなどをつきあわせ、読み合せてみる。そして、私の研究テーマ＝「（ドイツ・ヨーロッパの）技術と経済」、「都市化と人間」＝についてA市とB館で考えたことを{情報メモ}に記入する。

結局これだけのことの積み重ねである。警察官や探偵小説の主人公のごとく、（私の）博物館の知的生産の技術も何度も現場を踏めば体が覚えるもの（経験技術）である。

4. 「よいもの」を選び、遊び歩き、考察する。そして加えて事前および事後に連絡を欠かさないことが、私の博物館における技術史研究の基本原則なのである。外国語で手紙を書くことは、慣れるまで、また慣れてもなかなか苦心の要るものである。

ここで事前とは、研究会などの機会にえられた情報や

文献などをとおして、A市のB博物館に焦点を定めるまでのことである。事後とは、見学や訪問、アンケート依頼などの後で、礼状や（B館に関係する、自作あるいは共同の）印刷物・ペーパーやレポート、または成果物がなく疎遠となったとしても、クリスマスカードや季節の挨拶を送付することをいう。

国際化時代といわれる今日、いかにせよ連絡さえ絶やさなければ、思いがけない情報や最新のニュースを手に入れるチャンスはたいへんに多いのである。外国人といえども同じ人間であり、学生・生徒をどのように教育するか、或る（技術史や博物館の）テーマについてどのように接近（アプローチ）するか、同じように悩み苦しんでいるというのが実感である。選び・遊び・考え・連絡することは、まさしく「先憂後楽」に通じるのである。

私の技術史も博物館学も「独学」であり、独善を抜け出す端緒は独作文であった。今日の世界を見渡すと、身近なものから宇宙にいたるまで、技術史の研究対象は広がっているけれど、博物館ではこの大小二つの宇宙に大衆科学的に参加できる。展示する側であれ、鑑賞する側であれ、この「参加」することが何よりも大切なのである。

こうして、博物館に始まり、博物館に帰着する－そしてその過程で「選択」して、「散歩」し、「考察」して、「連絡」する－ことが、私の技術史の知的生産の技術の、あたりまえだが肝心な点なのである。

わが国の博物館の総入館者数が、プロ野球の総入場者数を上回る日の来ることが、私の毎年見る初夢である。そして、21世紀においてそれは不可能ではない、と私は信じているのである。

〈1989. 1. 10. 稿了〉

註

* 梅棹忠夫『知的生産の技術』（岩波書店／新書、1969）の提起した諸問題が、本稿のベースにあることは言うまでもなからう*。

- 1) ドイツ連邦共和国最初の「経済史・技術史講座」は1966年冬学期、ルール大学（ボッフム市）歴史学部に開講（主任アルブレヒト・ティム教授）された。
- 2) 日本産業技術史学会は1984年に設立された。
- 3) 三枝博音、薮内清などを研究第一世代とすると、第

二世(現役)の前述吉田光邦, 内田星美, 中岡哲郎, さらに山崎俊雄, 奥村正二, 飯田賢一などの諸先学から聞き取ったものである。(現在30~40歳代を第三世代としている。博物館学研究ではどうか, ご教示いただきたい。)

4) 木下是雄『理科系の作文技術』(中央公論社/新書, 1981)参照。

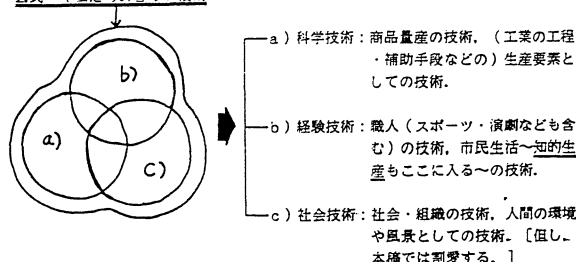
5) タイプライターの発案は18世紀初めにさかのぼる。その約150年後の1867年1月オーストリア人ペーター・ミッターホーファー(Peter Mitterhofer)によって実用的な(しかし大部分は木製の器械の)発明がなされた。そしてはやくも1880年代には, タイプライターは工場の工業生産のラインに乗っていたのである。〔R. ゾンネマン編『技術の歴史』(ライプツィヒ, 1978)より〕。

アメリカにおいて「需要◆供給◆需要」のサイクル, すなわちブームとなったものを見てみれば, 1850年代のミシン, 80年代のタイプライター, 90年代の自転車, 1910年代の自動車などをあげられる。いわゆるマスコミュニケーション論・大衆社会論としても興味深い問題である。

6) 「技術」をわかりやすく図表化してみれば次のようになろう。

〔私が示唆を得たのは寺尾誠『価値の社会経済史』(税務経理協会, 1977), 山田慶児『科学と技術の近代』(朝日新聞社/選書, 1982), W. ラムメルト, A. ティムその他である。〕

図式-(私たちの言う)技術



Cf. より専門的には次の書を参照されたい。

Günter Ropohl, Eine Systemtheorie der Technik. Zur Grundlegung der Allgemeinen Technologie, München/Wien 1979 (bes. S.32)

図1

7) 『博物館・情報検索事典』(丹青社, 1986)を参照。〔海外に関しては改良すべき点が多いが, 国内の博物館に関しては一読(検索)すべき, 文字どおりのデータブックである〕

8) 第三回国際産業遺産保存会議(T I C C I H)と略称,

1978年スウェーデン)において, 「実物資料」=遺跡・遺物・〔技術〕記念物などー日本語では, 「文化財」にほぼ相当する=を英語で「Industrial Heritage」に統一しようということになった。cf. 庄谷邦幸・種田明「産業技術史における各国博物館の機能に関する国際比較調査研究ードイツ・オーストリアー」(『技術と文明』第六冊4巻1号, 思文閣, 1988所収)を参照されたい。

9) 種田明「文化遺産と博物館」(大西健夫編『現代のドイツ』10, 三修社, 1982所収)参照。

10) 金丸輝男編『E Cー欧州統合の現在』(創元社, 1987)参照。

11) 前掲〔(8)cf.〕: ドイツ連邦共和国の技術博物館は, 101都市に127館(1985年現在: D Z T=ドイツ観光協会調べ)があるが, 郷土(史)・歴史(考古学)・工芸博物館でも「技術」を重視するもの多くて, 一概に論ずることはできないのである。

12) 木下前掲書〔註(4)〕から引用。

13) 研究者はおおむね以下の組織に(重複)加入している。〔○印: 技術史に関連が深いもの〕

IUHPS (国際科学史・科学哲学連合),

○ドイツ医学史科学技術史協会(1901年設立),

○G. アグリコラ協会(1926年設立),

ドイツ薬学史協会(1926年設立),

科学史学会(1964年設立),

○大学=科学史を含め30大学に講座・科目がある; 1981年現在,

○ドイツ鉱山博物館(1930年設立),

○ヘッセン州立美術館カッセル・天文物理室(1935年再開館),

○ドイツ博物館ミュンヘン(研究所: 1965年開設), DVT (ドイツ技術学協会連合)=OVDI (ドイツ技術者協会)など43団体の連合組織。

ドイツ・ヨーロッパの博物館(内)研究者や技術史家たちに共通しているのは, 相互に相手の仕事(研究)についてよく知っているということである。その社会的地位も高く, 大学教員並みである。したがって, クライスに入る, 友人を作ることが最初の「知的生産の技術」なのである。1992年のE C (12ヶ国)経済統合がタイムテーブルに載った現在, 教育と文化の基盤(博物館)については組織化が進んでいる。